



子どもを「褒める」 3つの誤解!?

先日、幼稚園の先生から、「できていないことを叱るよりも、できていることを褒めると良いと聞き、実践していますが、そうするとこちらが見ている時はきちんとするのですが、見ていないとやらないという子どもが出てきます。大人の前ではゴミを拾う子どもが、見ていないところでは、さぼっているのです。褒めるのは本当に良いことなのでしょうか？」という質問をいただきました。



【誤解①】 見られていないとやらなくなる？

まず、やって当たり前のことに対して、「えらいね」「すごいね」「頑張ったね」などの褒め言葉を連発し過ぎると、「それをやっている自分はすごい」と思うようになってしまいます。もちろん、落ちているゴミを拾うことは素晴らしいことなのですが、何のためにするのかを考える前に、大人の評価を得るためにやるようになってしまい、評価につながらないならやらないという選択をしてしまいます。何でも褒めちぎれば良いというわけではありません。逆に、何も言わなくてもいいというわけでもありません。「お部屋がきれいになって気持ちいいね」「お片付けをしてくれて助かったよ」など、その行動によってどんな良い影響があったのかを伝えてあげると、子どもは自分の行動の意味を考えます。見られていないところでも、どうすればいいのかを考えられるようになります。

【誤解②】 褒めるとそれ以上頑張らなくなる？

また、「褒めると『これでいいんだ』と子どもが勘ちがいしてしまい、それ以上頑張らなくなるのでは？」と心配する質問がありました。確かに、「いいね」「上手だね」といった褒め言葉だけだとそうなるかもしれません。そこで、「褒める」+ α が必要です。褒め言葉の後に、「次はどうでしょうか？」「他にできそうなことはある？」などの質問をしてあげてください。もちろん、成し遂げたことに対しては十分に認め、「これでは不十分だよ」というニュアンスではなく、「あなたにはもっと素晴らしい力があるんだよ」ということが伝わるように関わるのが大切です。

【誤解③】 褒めると甘やかすことになる？

さらに、「褒めると、子どもを甘やかすことにつながりませんか？」という声もあります。「何でもほしいものを買ってあげるから」など、子どもに迎合して言うことを聞かせようとするがありますが、これは「褒める」とは違います。「褒める」は「承認」の一部分と捉えていただけたらと思います。「褒める」には、相手の言動を評価するニュアンスが多少にじみますが、「承認」とは相手の存在そのものを肯定的に認める関わりです。承認されることで、子どもは自己の存在価値や自己肯定感を覚え、「もっとこうしてみよう！」という前向きな気持ちが湧いてきます。単に、何でも手放しでわがままを聞く「甘やかし」とは違うのです。子どもが「自分は価値ある存在だ」「自分は大切にされている」と感じられるような承認をたくさんしてあげてください。